２０２４年７月１４日聖霊降臨後第８主日説教

アモス書 7 章 7-15 節
エフェソの信徒への手紙 1 章 1-14 節
マルコによる福音書 6 章 7-13 節

本日の福音書は、イエス様が宣教について教えている個所です。イエス様は、ご自分を受け入れなかった故郷ナザレでの出来事の後、唐突に十二人を呼び寄せて各地に派遣します。ナザレの人々は、イエス様をよく知っているからこそ、人間的な思いが先に立ち、受け入れませんでした。それでは宣教を行う側、伝える側には何が大切か、その点について、イエス様はここで指示を与えるのです。

イエス様はまず７節で、宣教に遣わすにあたっての全体方針のような指示を与えます。「**十二人を呼び寄せ、二人ずつ遣わすことにされた**」（マルコ６：7）とあります。ここでの「十二人」は単なる人数ではなく、特別な意味を持ちます。３章１２節から１９節で選ばれた１２人、いわゆる「十二使徒・弟子」です。「**二人ずつ**」は、一人より二人の方が心強いということもあると思いますが、宣教活動が個人という枠組みを超えるものとなるためでしょう。イエス様に従って行う宣教活動は、自分の願いや思いを実行することではないからです。次に「**その際、汚れた霊を追い出す権能を授け**」と続きます。教えを言葉で宣べ伝える「宣教」という行為に、「汚れた霊を追い出す権能」を加えているのは、イエス様ご自身の教えが、カファルナウムの会堂での出来事にみられるように（マルコ１：21-28)、「言葉」と「出来事」の両方ある「権威ある新しい教え」であるからです。

次に具体的な指示が続きます。前半部は、持ち物についての注意事項です。「**旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず**」（マルコ６：8）とあります。「**杖**」は、様々な用途がありますが、「自衛の道具・武器」という意味もあります。「剣」など攻撃的な道具・武器ではなく、あくまで追い払う道具・武器です。「**パン**」は、字義通りの意味ではなく食料の象徴です。食料を携帯するなということです。「袋」はそのままの意味ですが、旅の途中でいろいろと頂いたら貯められるようにと、準備をするなということでしょう。「**帯の中に金**」は、イエス様の時代も「帯の中」が現金の隠し場所であったと思われるのですが、お金も一切持つなという指示です。イエス様は、宣教に出るにあたり、通常旅に必要な備えはいっさい用意するなと命じ、主なる神様だけを信じて歩みなさいと指示しているのです。

さらに衣服に関する指示が続きます。「**ただ履物は履くように、そして『下着は二枚着てはならない』**」です。「履物」は、現代でいえばサンダルのような履物です。イエス様の時代の簡素で一般的な履物ですが、それをはいて裸足で宣教するなということです。２００９年にカンタベリー大主教が「裸足の宣教」という主題で講演をなさったときには、イエス様のこの指示について当然一切触れることはありませんでした。「裸足の宣教」という教えの理念的内容（ことにそれまでの「土足のままの宣教」のようなあり方への反省）には賛同しますが、ここでイエス様は、すべてを主なる神様にゆだねるといっても、人間としての最低限の装いは守りなさいと教えているのだと思います。なぜならば、過剰な装備も持つことも、また必要以上に貧しい恰好をすることも、そのどちらも人間的な思いであり、宣教活動の本質から

それるからです。「下着は二枚着てはならない」も同様です。「下着」は訳しにくい言葉ですが、肌の上、コートの下に着る服です。裸でもなく、重ね着や予備を用意するのでもなく、着の身着のままということばがありますが、イエス様は、普段の自分の姿で、主なる神様にすべてをゆだねて宣教に向かいなさいと、十二人に指示しているのです。

後半部分は、旅先での注意事項です。ここには二つの指示があります。まず、「**どこでも、ある家に入ったら、その土地から出て行くまでは、そこにとどまりなさい**」（マルコ 6：10）です。これはいろいろな家を次々と渡り歩かず、最初に受け入れてくれた家があれば、その家の状態がどのようであっても、そこに留まりなさいということです。人間的思いでよい方を選ぶなということです。次は「**あなたがたを受け入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があれば、そこを出て行くとき、彼らへの抗議のしるしに足の塵を払い落としなさい**」（マルコ 6：11）です。「抗議のしるし」は訳し過ぎ（私の提案した訳ではありません）で、直訳は「証しのため」です。つまり、「足の裏の埃を払う」行為は、決別の証です。それでもこの言葉は少し厳しすぎるようにも思えます。しかし、この厳しさには、宣教活動を行う方、受ける方、両方に向けられています。まことに主なる神様の愛を伝えたのか、それでもそれを拒否するのか、そのような問いを引き起こすからです。

この箇所は、最後に「**十二人は出て行って、悔い改めを宣べ伝えた。また、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした**」（マルコ 6：12-13）というまとめの句で終わります。十二人の使徒・弟子たちの宣教は成功したようです。しかし、この短い成功体験が、そのあとの弟子たちの行動に、悪い影響を与えるのです。この後は、聖書日課にはありませんが、洗礼者ヨハネの死の話が回顧のお話として挿入されます（マルコ 6：14-29）。捕らえられたと告げられていたヨハネは（マルコ 1：14）は、すでに処刑されていたのでした。このヨハネの姿は、明らかに読者にイエス様の未来の姿、イエス様に従う者の未来の姿を示しています。そのヨハネの死のお話のあと、有名な五千人の共食の話が続きます（マルコ 6：30-44）。そこから弟子たちは、イエス様の言動を理解でなくなり始めるのです。

十二人の使徒・弟子たちは、成功してしまったがゆえに、失敗していきます。イエス様から権能を授かり、イエス様の同じような宣教に成功し、思い上がってしまったのでしょう。人間的な思いの何かが入ってしまったのでしょう。その人間的な思いは、十字架の前から逃げるようにと弟子たちを促してしまいます。しかし、だからこそ十字架があるのです。イエス様は指示の中で受け入れないものに対する決別にも触れました。しかし、それでも最後には気付けるようにと十字架の姿を示されました。福音書が弟子たちの失敗を描くとき、それを教会で読む人々は気づかされるのだと思います。それでも、今教会があるということです。それは福音書が最初に読まれた一世紀にも起きたことです。そして、今も、そしてこれからも起こることです。十字架があるからこそ、私たちにはいつでも希望があるのです。失敗しても許されてまた歩めるのです。わたしたちもこれからも、礼拝から、そして様々な活動を通して、主なる神様の愛を示したいと思います。わたしたちがその歩みを続ける限り、まことの平和へが実現する希望は消えないのです。